



Title	フィールドワークを問う : 地域保健の立場から
Author(s)	安梅, 勅江
Citation	GLOCOLブックレット. 2015, 17, p. 51-71
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/55567
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

3

フィールドワークを問う 地域保健の立場から

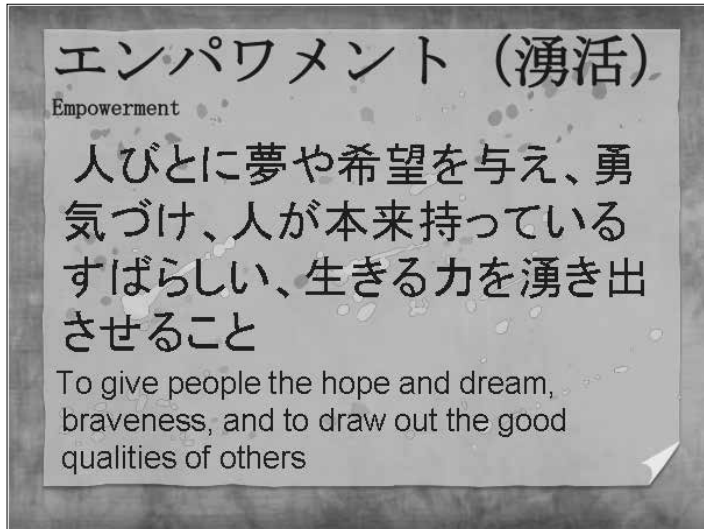
安梅勅江

筑波大学医学医療系教授

1. 共感的理解

昨今、家族や地域とのつながりが弱まり、無縁社会の広がりが懸念されている。子育てや看病、介護や緊急時のサポートなど、人びとが共に支え合う社会の仕組み、共にいのちの輝きに寄り添う営みがますます求められている。人がひとりでは決して生きていけない存在であることは、人類の進化の歴史を見れば明白である。人は助け合う社会生活を構築してきたからこそ、今日の繁栄を謳歌しているのだ。しかし現代社会は、その本来の姿に逆行する状況を呈している。

会社や病院、社会福祉施設などの組織においても、人びとのつながりのあり方は大きく変化している。短期的な成果の重視や利益追求の偏重は、雇用者が共に支えあい、育てあう組織のあり方を変貌させた。雇用者の組織に対する信頼がうすれ、仕事への動機づけを不安定なものにしている。



(Slide 01)

エンパワメント(湧活)とは、人びとに夢や希望を与え、勇気づけ、人が本来持っているすばらしい、生きる力を湧き出させることである。

英語のempowerment、エンパワメントは、「力」という意味の「パワーpower」に、「～にする」という接頭語の「エンem」がついた言葉である。もっている力を引き出す、発揮するという意味である。

だれにでもわかる言葉で表現すると、人びとに夢や希望を与え、勇気づけ、人が本来持っているすばらしい、生きる力を湧き出させることである。また、元気になる、力を引き出す、ぎずなを育む、共感ネットワークがエンパワメントである。個人あるいは組織、地域のなかにあるすばらしい力に気づき、育み、さらには思いや関心を発信し、共有し、共振することで新たな共創を生む。ある意味できわめて創造的なパワーであり、イマジネーションをかきたてながら伝播し、仲間や組織の本質を突く波動のようなパワーである。



(Slide 02)

エンパワメントという言葉は、さまざまな分野で使われている。実はその分野ごとにちがう定義がある。代表的なものを紹介すると、教育分野では、内発的動機づけ、成功経験、有能感、長所の伸長、自尊感情。社会開発分野では、人間を尊重し、すべての人間の潜在能力を信じ、その潜在能力の発揮を可能にするような平等で公正な社会を実現しようとする活動。ビジネス分野では、権限の委譲と責任の拡大による創造的な意思決定。保健福祉分野では自分の健康に影響のある意志決定と活動に対しより大きなコントロールを当事者が得る過程、としている¹。

1 安梅勲江 他、いのちの輝きに寄り添うエンパワメント科学—だれもが主人公 新しい共生のかたち—、北王路書房、2014



(Slide 03)

エンパワメントには、自分エンパワメント self empowerment、仲間エンパワメント peer empowerment、組織エンパワメント community empowerment の3つがある。

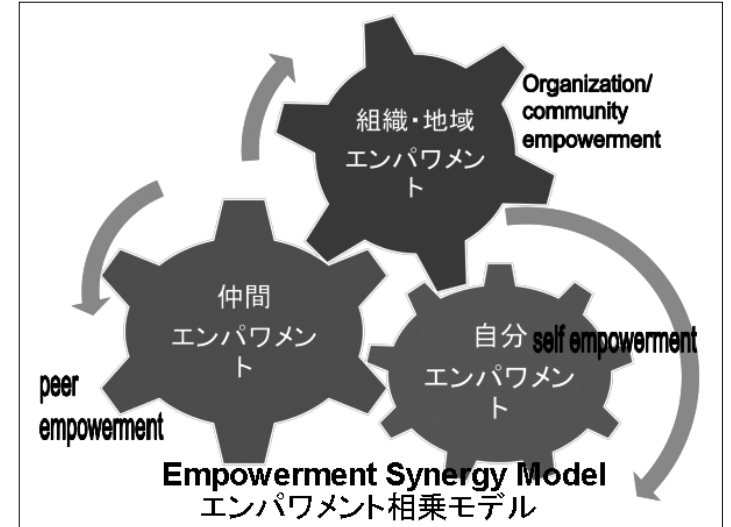
「自分エンパワメント」は、自分で自分を元気にすることである。たとえば、ちょっと落ち込んだ時、おいしいものを食べに行く、自分にごほうびをあげる、など多くの人は自分なりのやり方を持っている。

「仲間エンパワメント」は、仲間同士で元気を引き出すものである。たとえばスポーツチームでは、メンバーで声を掛け合ったり、フォローしあったり、練習後飲みについて語り明かしたりする。調子の悪いメンバーがいても、他のメンバーの支えや見守りがチーム力を復活させる。

「組織エンパワメント」は、場や集団の力を引き出すことである。たとえば職場や生活の場で知恵を出し合い、働きがいのある職場や、住みやすい街づくりを目指すなどである。街づくりなどは、「地域エンパワメント」という場合もある。

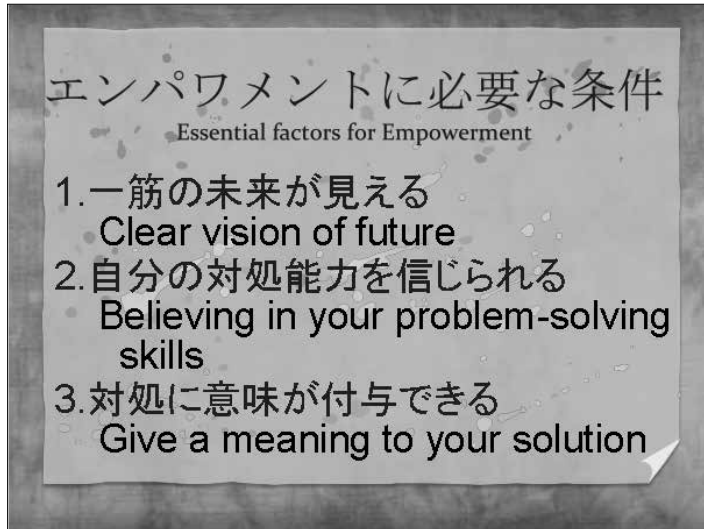
ここでいう組織は、英語ではコミュニティである。コミュニティとは、目的、関心、価値、感情などを分かち合う集団である。

これらを組み合わせて使うことで、相乗効果をもたらす。これをエンパワメント相乗モデルと言う。



(Slide 04)

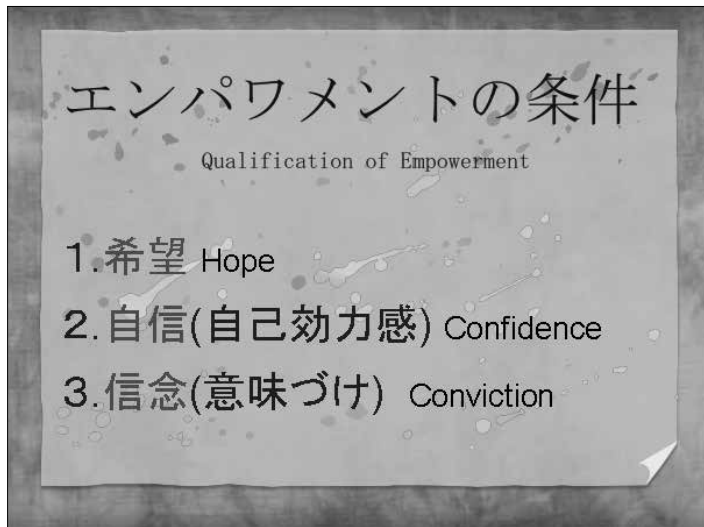
エンパワメントには、自然や人びと、自分の過去と現在、現在と未来とのきずなを育む力(絆育力)、生き活きと生きる力(活生力)、人びととともに生活を創りだす力(共創力)、の3つの意味がある。自分の力を発揮できる喜びは活生力、仲間とともにがんばる安心感は絆育力、世の中に夢をという社会的な意義は共創力に重なる。実はこれらは各々、自分エンパワメント、仲間エンパワメント、組織・地域エンパワメントと言い換えることができる。エンパワメントのコツの一つは、この3つをあえて組み合わせて使うことである。すると、これらが相まって、大きな効果が生まれる。



(Slide 05)

エンパワメントに必要な要素とはなんだろうか？ たえば絶体絶命のピンチにも、パワーレスにおちいらずに、前向きな気持ちでいられるには何が必要であるうか。

これまで世界中の多くの研究成果が大切な要素を示している。数ある要素のうち、どうしても欠かせないのは3つである。

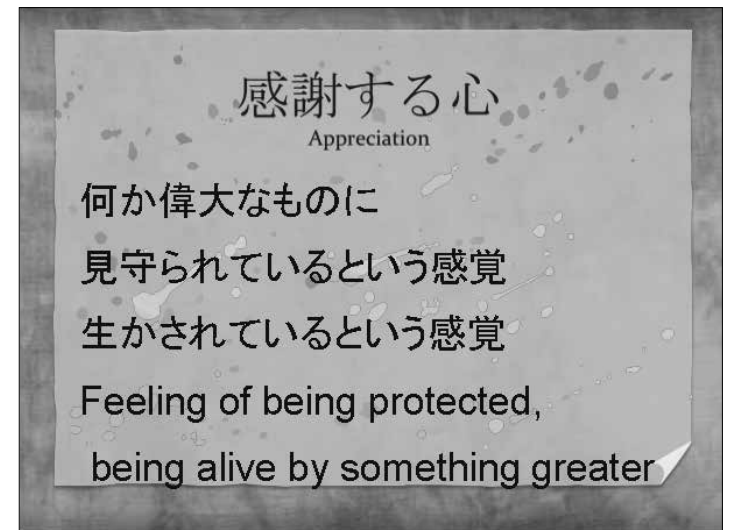


(Slide 06)

まずは希望である。一筋の光があれば、人は未来を託すことができる。その未来に向かって、歩みを進められる。

そして自信である。私にはできることがきっとある、という自分の力に対する信頼である。専門的な言葉でいうと、自己効力感(自分にはできるという感覚)、自尊感情(自分は大したものだという認識)などが含まれる。

最後に意味づけ(信念)である。希望に向かって努力する自分を、価値あるものと意味づけられるかどうか。希望と自信があっても、自分の行為に意味づけできなければ、あるいは信念がなければ、人は動かない。前に向かって進む最後の決め手になるのが意味づけ(信念)である。どんな意味づけでもいい。希望や自信の内容が何であれ、その人なりに納得できる意味づけができれば、人はエンパワーされる。



(Slide 07)

エンパワメントは、人と自然、人と人、今の自分と未来の自分、とのきずなを育むことである。自然とのきずなを運命として受け止め、生かされていることに感謝し、自分の未来と社会に向かって、きずなをしっかり育むことが、大きな力につながる。

エンパワメントの基本

Basis of Empowerment

1. 当事者の価値観は？
Values of the person?
2. 当事者のニーズは？
The needs of the person?
3. 当事者ができることは？
What can the person do?

(Slide 08)

2. 他者との関係性

客観的行動評価「かかわり指標」
社会能力のさまざまな側面を国際的に比較可能な形で、精度高く容易に測定可能。
人と人との相互作用を日常的な場面設定で簡単に評価することができる。

1. Interaction Rating Scale (IRS) :
子ども(0~8歳)と養育者・保育者など
2. Interaction Rating Scale between Children (IRSC): 子ども同士(3~15歳)
3. Interaction Rating Scale Advanced (IRSA):
15歳以上同士

(Slide 09)

他者との関係性を客観的に評価する手法の一つとして、行動を評価する

「かかわり指標」というスケールがある。社会能力のさまざまな側面を国際的に比較可能な形で、精度高く容易に測定可能である。人と人との相互作用を日常的な場面設定で簡単に評価することができる。下記の3種類がある²。

- (1) Interaction Rating Scale (IRS) : 子ども(0~8歳)と養育者・保育者など
- (2) Interaction Rating Scale between Children (IRSC) : 子ども同士(3~15歳)
- (3) Interaction Rating Scale Advanced (IRSA) : 15歳以上同士



(Slide 10)

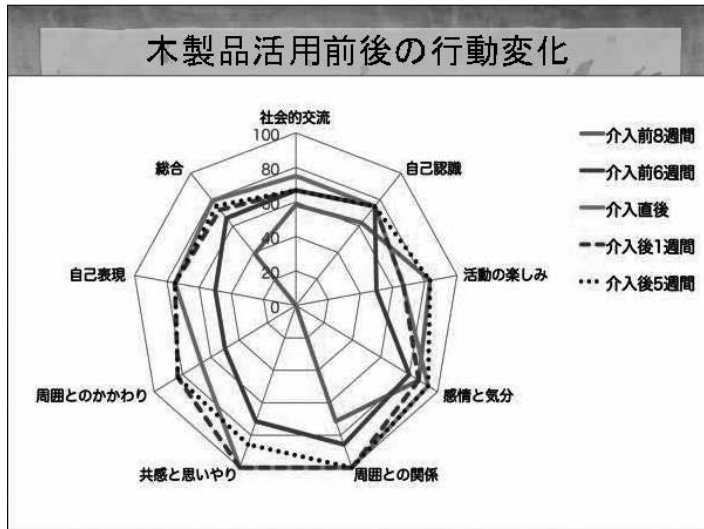
実際に多世代交流、ケア施設での交流の評価などに活用することができる。

指標の特徴は、下記のとおりである。

- 1) 汎用性が高い(日常的な場面設定、短時間(5分程度)、簡単な評価者トレーニングで実施可能)
- 2) 妥当性・信頼性が明示されている(基準関連妥当性、臨床妥当性、信頼性)
- 3) 国際比較可能な領域別に数値で評価する(既存研究と比較可能、発達パターン推移分析と気になるパターンの把握が容易)

2 安梅勲江 他、気になる子どもの早期支援と早期発見、日本小児医事出版社、2009

- 4) 複数者の社会能力を独立して評価するとともに、全体としての関連性を把握できる
- 5) 実践の場で専門職が容易に活用できる(相互作用の質評価、気になる状況の発見システム等への活用)
- 6) かかわりの特徴を測定し、支援に直接結びつけられる



具体的には、下記のとおりである。

(1) Interaction Rating Scale (IRS)

子どもの年齢相応より多少難しい課題について、養育者がかかわることにより子どもが達成に向けて取り組む場面を設定し、日常的で自然体に近い形での相互作用を評価することが望ましい。自由遊び場面で評価することも可能。

(2) Interaction Rating Scale between Children (IRSC), Interaction Rating Scale Advanced (IRSA)

相互作用が生じやすい課題を設定することが望ましい。たとえばスティッキーなどのゲーム。日常的な会話場面で評価することも可能。

評価領域、妥当性、信頼性は下記のとおりである。

(1) Interaction Rating Scale (IRS)

A. 子ども側面

- 1) 主体性 Autonomy 2) 応答性 Responsiveness 3) 共感性 Empathy
- 4) 運動制御 Motor self regulation 5) 感情制御 Emotional self regulation

B. 養育者側面

- 1) 主体性発達への配慮 Respect for autonomy
- 2) 応答性発達への配慮 Respect for responsiveness
- 3) 共感性発達への配慮 Respect for empathy
- 4) 認知発達への配慮 Respect for cognitive development
- 5) 社会情緒発達への配慮 Respect for social-emotional development

信頼性: クロンバック α 係数 0.91

妥当性: NCAST Teaching Scale と 0.89 の相関

気になる子どもの判別妥当性確認

(2) Interaction Rating Scale between Children (IRSC)

- 1) 協調 Cooperation 2) 自己制御 Self-control 3) 自己表現 Assertion

信頼性: クロンバック α 係数 0.87

妥当性: 頭部運動解析結果と 0.5~0.6 の有意な相関

(3) Interaction Rating Scale Advanced (IRSA)

- 研究用
- 1) 表現力 Expressivity 2) 自己主張 Assertiveness
 - 3) 解読力 Sensitivity 4) 他者受容 Acceptance

- 5) 関係調整 Regulation 6) 自己統制 Self-control

- 実践用
- 1) 協調 Cooperation 2) 自己制御 Self-control

- 3) 自己表現 Assertion

信頼性: クロンバック α 係数 0.84

妥当性: 担任の行動評価と 0.65 の相関

3. 他者の客観的理解



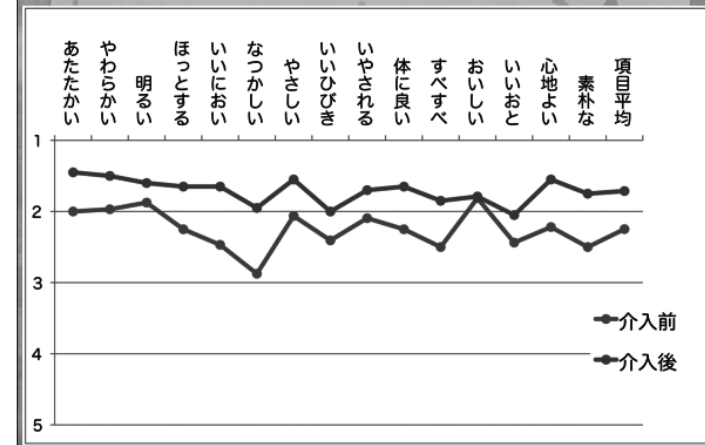
(Slide 12)

導入前(評価1)と後(評価2)の絵の変化

項目内容	平均値		p
	評価1	評価2	
バランスの良さ	22.4	31.7	n.s.
エネルギーの統制	24.7	35.4	*
パーソナリティの可塑性	29.4	37.5	n.s.
暖かく友好的な印象	28.8	38.3	*
協調的な自己表現	26.5	36.3	*
筆圧の安定性	34.7	42.5	*

(Slide 13)

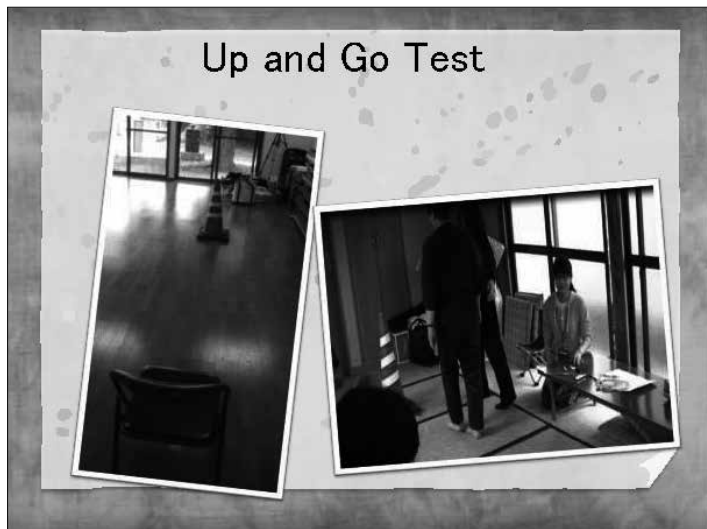
木製品導入効果 (専門職の介入前後比較)



(Slide 14)

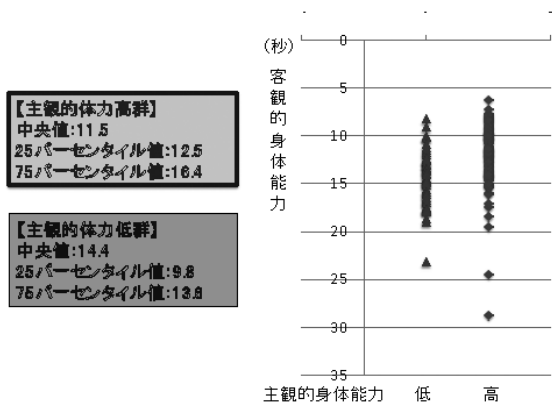
他者の客観的理解は、さまざまな「ものさし」を使い、ある側面を描く方法を用いる。ここではケア施設の木質化³、地域住民の介護予防に関する主観的理解、客観的理解の事例を紹介する。

3 Anme T, et al. Behavior changes in older persons caused by using wood products in assisted living, Public Health Research, 2(4), 2012



(Slide 15)

主観的身体能力と客観的身体能力の実態



(Slide 16)

転倒不安と 主観的身体能力, 客観的身体能力との関連

転倒不安あり

変数		オッズ比	95%信頼区間
主観的身体能力	低い	4.3	2.1 - 8.9**
	高い	1.0	
客観的身体能力	低い	1.2	1.1 - 1.4**
	高い	1.0	

+ : $p < 0.1$ * : $p < 0.05$ ** : $p < 0.01$ 二項ロジスティック回帰分析

(Slide 17)

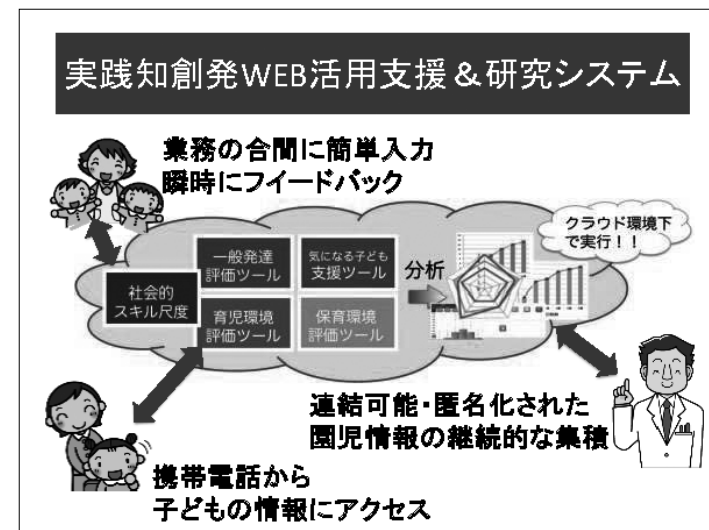
たとえば、客観的理解として行動観察や描画、運動機能評価などがある。しかし、アップアンドゴーテストで得られる客観的な体力評価と主観的な体力評価は、必ずしも一致しない。ただし両者とも転倒不安と関連していることが示されている。

4. 実践知創発



(Slide 18)

地域保健を支える専門職の実践知を、活かすためのフィールドワークの新しい方論を紹介する。WEBを使って実践と研究をつなぎ、データを効果的に蓄積しながらフィードバックする。またeラーニングやソーシャルネットワークサービスで、フィールドの双方向的なつながりを実現する⁴。

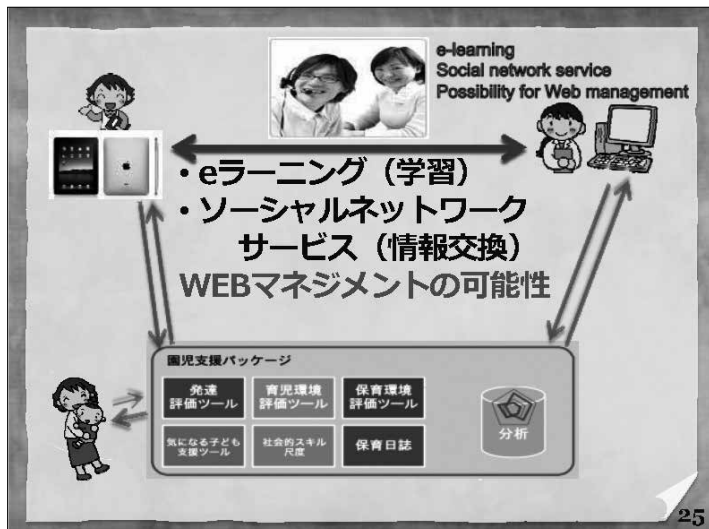


(Slide 19)

具体的には、保育所や幼稚園など子育て支援機関に所属する0～6歳の子どもの情報を、情報通信技術を利用して集積する「WEBを活用した園児総合支援システム(以下、本システム)」を開発した。

12年にわたるコホート研究による科学的根拠に基づいて開発され、信頼性・妥当性の検証されている5つのスケール(一般発達評価票、社会的スキル尺度、気になる子どもチェックリスト、育児環境評価票、保育環境評価票)と実践での活用方法をWEBアプリケーション化した。クラウドのプラットフォームに設置し、専門職や保護者が様々な端末から入力する情報を継続的に集積し活用できるようにした。

4 Watanabe T, Anne T, et al. Development of a Scale for Assessing the Childcare Information Utilization Skills of Childcare Professionals (SACIUS), International Journal of Psychology and Behavioral Sciences, 4(1), 21-29, 2014



(Slide 20)

実際に情報を取り扱う専門職、研究者、及びパソコンコールセンターを運営してきたIT専門家をメンバーとして、10回のシステム開発会議を行った。専門職のニーズにもっとも近い、活用しやすい画面構成や動作、実際の活用に向けた検討を重ねカスタマイズを繰り返し完成させた。

大きめの画面をタップしながら情報を入力すると、結果を瞬時に集計し、グラフ化し視覚的に表示する。全国平均や標準値との比較ができ、個々の子どもの発育状況をグラフで確認することができる。

特別な配慮が必要な子どもについてはアラートを示し、かかわりのヒントを表示する。さらに、目標、課題、背景、影響要因、支援方法、根拠で構成される「支援設計レポート」作成機能を搭載し、根拠に基づく日々の子育て支援を支える。

専門職は子どもの発達状況の特徴を視覚的に確認し、配慮を要する子どもや保護者を早期に把握し、根拠に基づく支援を行うことが可能となった。保護者に対しては、わかりやすく子どもの状態を示し、保護者と専門職が子どもに関する情報を共有することができる。本システムは、連結可能、匿名化された情報を継続的に集積する。これにより研究者は、子どもの発達に関する経時的な情報記録を活用し、子どもの発達に関するさらなる根拠を生み出しシステムにフィードバックすることが可能となった。

5. 新たなフィールドワークに向けて



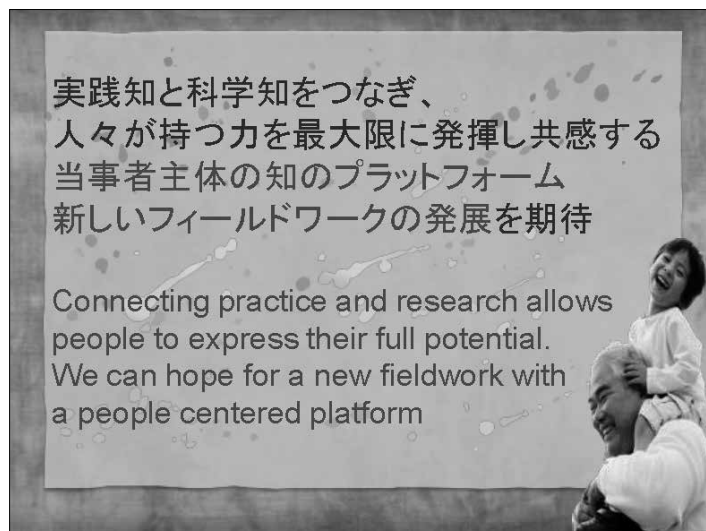
(Slide 21)

フィールドワークは、誰もが主人公と感じる、新しい共生のかたちへの展開が求められる。例えばオリジナル体操の活用など、地域住民を主体とした参加型フィールドワークが典型的である。単に体を動かすことにとどまらず、「曲を聴くだけで元気になる」「曲が楽しく簡単にできる」「郷土を愛する気持ちが生まれる」「仲間とともに生きているという喜びを感じる」などの声がある。身体的効果にとどまらず、精神的効果、社会的効果、スピリチュアル効果が実現される。



(Slide 22)

参加者は様々な立場の変化を経験する中で、活動を通じて、自分の新たな役割を見出している現状がある。新たな役割を獲得することで「自己効力感」が高まり、地域活動の継続と発展に向けたさらなる意欲につながることが示された。



(Slide 23)

当事者主体型のフィールドワークが目指すのは、実践知と科学知をつなぎ、人々が持つ力を最大限に発揮し共感する当事者主体の知のプラットフォームの構築である。新しいフィールドワークの発展を、大いに期待するものである。



(Slide 24)